

共通点を見つけて

いわき市立藤間中学校 3年 木田 翔子

私たちがよく使う、「普通」という言葉。「私なんか普通だし...。」「あの人は普通じゃないから...。」などと言うけれど、その「普通」の基準はどうやって決められるのだろう。

学校の中だと、成績の「普通」はテストの結果などで決まっていく。平均並みなら「普通」、それ以外は「普通じゃない」というように。

また、地域にある文化や方言、習慣などは、地域の人々が長年受け継いできた、その地域の「普通」だ。その地域の人々の目には、それ以外の風習は、「普通じゃない」と映るだろう。

ところが、その「普通」の基準は、簡単に変化してしまう。学校という集団の中で、成績が「普通じゃない」と思われていても、範囲を他校などに広げ、同じような実力を持った人の集団の中で比べると、「普通だ」とされることもある。自分の地域の風習を「普通」、それ以外を「普通じゃない」と思っている、その他の地域から見ると、その逆だってあり得る。

このように、周囲の環境や比べる対象、視点や立場が変化すると、「普通」の基準はあっというまに変化する。「普通」だったものが普通ではなくなった、普通ではないことが「普通」になったりしてしまうのだ。

私は、「普通」とは、自分と似ているものや、自分の身の周りで多数派であるものを指す言葉なのではないかと思う。一方で、自分と違うもの、少数派でなじみのないものを、「自分とは違う存在だ」と突き離してしまっているようにも感じられる。そして、その「自分とは違う」という考え方が、差別や偏見を生み出してしまうことがある。

言葉や肌の色、文化の違い。障がいの有無。それらの違いを理由に、人種差別や障がい者差別など、理不尽な差別が、世界中で行われている。ニュースなどで見聞きする内容に、私は衝撃を受けてばかりだ。

最近では、外国で起きた黒人の子供への人種差別のニュースが一番印象に残っている。以前にも、白人の警察官が無抵抗な黒人に対して発砲し、射殺してしまったという事件があった。そのときは、いまだに人種差別が続いていることや、その残酷さに衝撃を受けた。今回は、人種差別が容赦なく幼い子供にま

で及んでいるのを知り、とてもショックだった。

人種差別を受けたのは、遊園地を訪れていた女の子だった。キャラクターたちが道を歩いてパレードをしている最中、その子はキャラクターにハイタッチを求めて手を出した。すると、そのキャラクターは女の子を見た途端、目をそらして首を振り、ハイタッチをせずに通り過ぎていったのだ。その直後の女の子の表情は、とても複雑だった。無視されたことへの疑問や悲しさが、ひしひしと伝わってきた。その子が、自分は肌の色で差別されたと知ったら、どれほど傷つくだろう。

私は、見た目で人を差別したその白人を批判する気持ちになると同時に、以前の自分の偏見を反省する気持ちになった。

私は、黒人の先生に対して偏見を抱いていたことがあった。英語塾で、初めてその先生に会ったとき、「怖い」と感じてしまったのだ。私の中では、「黒人＝アフリカ人＝先住民＝槍を持って暴れている」という本当に勝手なイメージを作り上げていた。「自分と違うから」と相手のことを知ろうともせず、心の中に偏見を抱いたままだったので、その先生とは、うまく会話することができなかった。

しかし、何度かその先生に会い、先生のことを知っていくにつれて私の思いは変わっていった。先生は、私の授業を担当していないのに、私に会うと必ず声をかけてくださるし、たどたどしい英語で話す私を、笑って見ていてくださる。先生の優しさに触れ、私の偏見は少しずつなくなっていく。肌の色が自分とは違うから。考え方や文化が違うから。だから、私との共通点はない。私とは違う。そう考えていたことを恥ずかしく思った。

自分とは違う、自分のまわりを基準にした「普通」とは違う「少数派」のことも受け入れることができないと、人種差別や障がい者差別など、あからさまな差別につながる。また、自分と相手の違いにばかり気を取られていると、偏見の目で見えるようになってしまう。

目に見えて分かる差別と、人の心の中に隠れていて、見えない偏見。それらを減らしていくためには、一人一人が、他人の「普通」を受け入れ、それを自分自身の「普通」に加えていけるようになることが必要だと思う。相手を受け入れるためには、違いを見つけるのではなく、自分と同じところを探すことが一番大切だ。共通点が見つかれば、それぞれの「普通」が重なり合うはずだ。

私は、偏見の目で見えてしまうことを繰り返さないように、相手との共通点を見つけることを大切にしていく。表面上ではなく、心で相手とつながれたらいいな、と思う。